

# 緒 言

ここに展示されている絵は、実際の体験者及び本人からの聴き取りによってその遺族が描いた絵で、おもに日中戦争期（1931～45 年）、日本軍の爆撃機が中国諸都市に行った空爆の記録です。いわば“空からの中国侵略”の証拠にあたるものです。

20 世紀戦争の特徴のひとつである都市爆撃。それは、ヨーロッパではイギリス・アメリカ vs ドイツの「ヨーロッパ航空戦」（1939～41 年）として、また 44～45 年には米 B-29 による「対日戦略爆撃」の名で実行されました。

しかし、日本軍機による中国への空襲は、じつはそれよりも早く、1937 年から上海、南京、武漢などに向けられていたのです。とりわけ 38 年以降、「重慶大爆撃」と称される、四川省・重慶や成都などにたいする、長期（2 年半余）・連続（200 回以上）・無差別（焼夷弾による焼き払い）の爆撃は、世界戦史に新時代をもたらす惨劇となりました。

「加害者はだれか？」の問いから、わたしたち日本人は顔をそむけることができません。同時に、それが、いまもシリアやイラク、イエーメンの市民に向けられている現実であることも、わたしたちは忘れません。そのような思いから、この展示会は企画されました。

けれども、この「空爆の現代史」に道を開いた日本軍機による「重慶大爆撃」は、日本人の共通の記憶に、いまだなっていない。

「重慶ってどこ？ 大爆撃ってなに？」というのがふつうの市民の反応ではないでしょうか？ 教科書でまなぶことも、語り継ぐ人がいるわけでもありません。

しかし、火の海を逃げまどい生きのびた中国人受害者にとって、恐怖体験はいまだ鮮烈です。体に受けた傷がなおうずく人、思い出が、閃光のように脳裏に蘇える「フラッシュバック」に悩む人もいます。四川省の人びとは、そんな追憶とともに生きてきたのです。

それら被害者と遺族たち 188 人は、2006 年から 09 年にかけて 4 次にわたり、日本政府に「謝罪と補償」をもとめて裁判を起こしました。2015 年の東京地裁判決は、「無差別爆撃の事実を認定する」としながらも、そのいっぽうで、重慶爆撃は国家賠償法制定前のできごとなので、「国家無答責の法理」により「被害者が日本に損害賠償を求める法律上の根拠はない」と、原告請求をしりぞけました。現在、審理は東京高裁で継続しています。

（2017 年 12 月 14 日東京高裁で控訴棄却）

おもえば、20 世紀は「空爆の世紀」といえるものでした。

ピカソの壁画で知られるスペイン・バスク地方の「ゲルニカ爆撃」（1937 年）にはじまり、重慶～ロンドン～ドレスデン～東京～広島・長崎とつづいた、突然の、空からの火炎攻撃…。それは戦争による人間の死にあらたなかたち——都市と非戦闘員住民を攻撃目標に変え、無差別に焼き殺す手法——を持ちこみました。

その戦争の“悪しき進化”に日本人もまた巻きこまれ、東京、横浜、広島、長崎で多くの墓標と記念碑をつくることとなります。ドイツとともに、日本は最大の空襲死亡者50万人余を生みました。

とはいえ、それがどこから来たのか？ を問うとき、わたしたちは、被害者の顔だけをもって中国人と相對することはできません。「重慶」の死者たちが立ち上がってくるからです。ドイツ大統領がゲルニカ市長に謝罪したように、ロンドンとドレスデン両都市が和解したように、わたしたちの空襲観を変え、重慶と向き合うことがもとめられます。

さらに言うならば、戦争の悪しき進化がなお歩みを止めず、第2次世界大戦のあとにおいても、朝鮮戦争（1950年代）～ベトナム戦争（60年代）～湾岸戦争（90年代）へとつづき、21世紀に持ちこまれた現実を直視する必要があります。焼夷弾がナパーム弾、白燐弾にかわり、テレビ爆弾やスマート爆弾が登場しました。ドローン（無人機）による遠隔爆撃も開発されました。しかし、どれほど技術が洗練されようとも、“誤爆”という無差別殺戮は絶えません。劣化ウラン弾のように放射線被害を無限にのこす爆弾もあります。

いま、「アレッポ」が「新しい重慶」なのです。廃墟となったシリア・アレッポの街から重慶の悲劇を思いおこし、過去の重慶を現在のアレッポにかさねながら、わたしたちは、空襲を、戦争を否定する思想をつくりあげねばなりません。

そうした願いをこめて、詩をひとつ掲げます。日本に学んだ文学者・政治家の郭沫若（1892～1978年）が、1939年5月、重慶の爆心地で詠んだ五言古詩「惨目吟」です。東京に降ったナパーム弾が、おなじ惨状をつくるのは、それから6年後のことでした。

### 惨 目 吟

五月三日と五月四日と、一人の子供は腹の下に横たわり、  
敵機は連日やってきた。もう一人はふところに抱かれていた。  
重慶は惨憺たる爆撃を受け、骨と肉とはコークスとなり、  
死者は山のように積み重なった。かたくくっついて引き離せない。  
その中の一つの死骸と見えたもの、ああ、やさしい母の心は、  
母一人と子供二人だった。永久に灰にはできないのだ。（訳 上原淳道）

### 重慶大爆撃の被害者と連帯する会・東京



Hiroko